

第14回市民賞

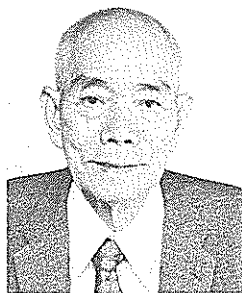
個人4人、 団体1を表彰

市政発展に功労のあった個人や団体に贈られる「第14回市民賞」に、今年は個人4人、団体1が選ばれました。
市民賞を決める選考委員会（利岡富次会長・委員9人）は十月十八日に開かれ、市民から推せんのある人の中から川北王治（よしはる）さん（後免町）ら個人4人と団体1をそれぞれ表彰することを決めました。
表彰式は十一月三日（文化の日）に市役所で行われ、小笠原市長から表彰状と記念品が贈られます。

《産業経済》

川北王治さん

（後免町・83歳）



明治三十二年五月二十一日生まれ。明治十八年創業の伝統ある印刷会社を経営。県下では設備、技術ともに群を抜き、印刷業界に「この人あり」と言われる手腕は多くの人が認めている。

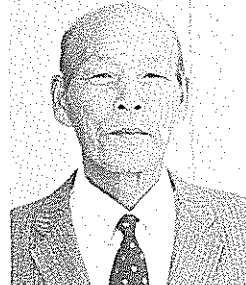
特に「広報なんごく」を長年にわたり印刷し、市民と市政のバイブル的役割を果たす一方、観光方面のパンフレット、ポスター等の印刷

にその技術を發揮し、間接的に行政に寄与した功績は大きい。

また、町内会においても適確な判断力と温情ある人間性で、多くの人望を集め、明治・大正・昭和を生きて抜いてきた経験を生かし、各方面に活躍している。

中沢正男さん

（稲生・70歳）



明治四十五年一月二十日生まれ。昭和二十九年に旧稲生村議会議員となり、以後同農業委員、同土地改良区など数々の要職を歴任。特に、稲生土地改良区では理事、

会計、監事合わせて二十一年間にわたり要職を務め、稲生方式といわれる独特の事業形態で地区内農道の舗装を完成させるのに貢献し、他地区の模範となる。

さらに、稲生のゼロ地帯の民家、水田を救済しようと、治水工事を完成させるために献身的に努力し、今年八月に完成した下田川高潮対策の排水ポンプの実現に尽力した功績は大きい。

《行政》

高木正延さん

（前浜・71歳）



明治四十四年五月三十日生まれ。昭和二十七年から旧前浜村議会議員、同三十一年から旧香長村議会議員、同三十四年十一月から同四十二年十一月まで市議会議員を務める。この間、市観光協会の設立を推進、琴平山観光道路の完成に尽力する。

さらに、旧前浜・南部両小学校統合建築推進委員長として活躍、大湊小学校建築を実現させる。また旧前浜・南部両保育所を統合し、

東工業高校

創立20周年を迎える

シバテンの住居であり、火玉も出たというところ——篠原神社と稲吉神社の中間に位置し、子供たちの魚捕りの場であった黒沼と沼ヶ池につながる水田地帯に、市民の要望により県立東工業高校が誕生してから、二十年の歳月が流れました。

十一月十三日には同窓会が主催し、教職員、生徒およびPTAな

成するために全国に工業高校が多数新設されました。本県でも他県に誇り得るものを……との念願と努力のもとに、校地四万平方メートル、校舎一万平方メートルの本校が四年計画、三億五千万円の巨費を投じて建設されたのです。

落着いて勉強ができ、立派な校風の育ち得る良い環境を……という基本構想から出発して、五カ所の候補地の中から現在の篠原地区が選ばれたのは、まさに「地の利、人の和」あつての成果でありました。

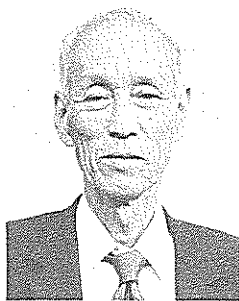
野中兼山が開いた舟入川の分岐流を利用して発達した水車利用の精米工場、黒い煙を吐く片倉製糸の工場、そこあたりに点在する鋤（すき、鍬）（くわ）をつくる野鍛冶の工場……（それから発展してエンジン付の農機具に、さらに鈴江農機が設立された）そんなたずまいの中に位置することになったのは、まさに当を得たと言えましょう。

篠原の一等地の売却に協力された関係者のかたがた、協和、鈴江の両社による各一千万円を含む三千五百万円の地元負担金の調達、さらには土電停留所の新設と校門より通じる工事用道路の通学路への変更問題など、難問がつぎつぎに解決されたのは、PTAや地元関係者の、まさに「和」の致すと

《社会福祉》

吉村源一さん

（物部・73歳）



明治四十二年一月十五日生まれ。昭和二十八年より同三十四年まで民生児童委員を務める。同四十年に再び民生児童委員となり、今日まで十七年間の長きにわたり社会福祉の増進に尽力する。現在は市民児童委員協議会監事の要職にある。

地域においては、日章地区社会福祉協議会監事、同老人クラブ連絡協議会理事として活躍。常に強い社会奉仕の精神に燃え、地域社会の福祉増進のために献身的な活動をするなど、社会福祉向上に尽した功績は大きい。



20周年を迎えた東工業高校—
11月13日には記念式典が行われる

心配された入試も倍率一・四、高知市内校の先生方の応援を得て試験も高知工業高校で行われ、突貫工事による仮校舎も校庭東側に教室四を含む七室が建ち、今村校長以下教員十九名、事務職員六名、全百制百八十名、鈴江、協和の訓練生を主体とする定時制四十五名の生徒が入学、開校式は昭和三十七年四月十日大篠小の講堂で……という出発でありました。

開設学科は現在と同じく機械科と電子科でありましたが、翌年設置された工業計測科とともに、トランジスタや自動制御等に始まるエレクトロニクス時代の開幕を予想したものでありました。

昭和四十二年に屋内体育館とプール、同四十七年には格技場と施設も完備され、現在生徒数五百八十名、教職員七十九名、卒業生も三千八百名を数えるようになりました。

工業の「工」でもあり、また天と地を人によって結び天地の資源を開発する人間をあらわす「工」の字を中央に、両側に希望に燃えて飛立つ若人を象徴する翼をあしらった校章。歩み多き若人の未来を讃えた校歌を掲げて、東工業の生徒は今日も頑張っています。

川端 恒

（東工業高校同窓会会長）